

登場人物

ナレーター

はじめの紳士（紳士1）

もひとりの紳士（紳士2）

山猫1

山猫2

犬たち

猟師

一場

◆山奥。二人の紳士が狩りをしている。

◆ナレーター・はじめの紳士・もひとりの紳士

二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二足つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを云いながら、あるいております。

紳士1 「ぜんたい、こちらの山は怪しからんね。鳥も獣も一足も居やがらん。なんでも構わないから、早くタンタアーンと、やって見たいもんだなあ。」

紳士2 「鹿の黄いろな横っ腹なんぞに、二三発お見舞もうしたら、ずいぶん痛快だろうねえ。くるくるまわって、それからどたと倒れるだろうねえ。」

それはだいぶの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちよつとまごついて、どこかへ行ってしまったくらいの山奥でした。

それに、あんまり山が物凄いのので、その白熊のような犬が、二足いっしょにめまいを起こして、しばらく吠って、それから泡を吐いて死んでしまいました。

紳士1 「じつにぼくは、二千四百円の損害だ」

と一人の紳士が、その犬の眼ぶたを、ちよつとかえしてみて言いました。

紳士2 「ぼくは二千八百円の損害だ。」

と、もひとりが、くやしそうに、あたまをまげて言いました。

はじめの紳士は、すこし顔いろを悪くして、じっと、もひとりの紳士の、顔つきを見ながら云いました。

紳士1 「ぼくはもう戻ろうとおもう。」

紳士2 「さあ、ぼくもちょうど寒くはなったし 腹は空いてきたし 戻ろうとおもう。」

紳士1 「そいじゃ、これで切りあげよう。なあに戻りに、昨日の宿屋で、山鳥を拾円も買って帰ればいい。」

紳士2 「兎もでていたねえ。そうすれば結局おんなじこった。では帰ろうじゃないか」

二場

◆山奥。ふたりの紳士が道に迷い、山猫軒を見つける。

◆ナレーター・はじめの紳士・もひとりの紳士

ところがどうも困ったことは、どっちへ行けば戻れるのか、
いっこうに見当がつかなくなっていました。

風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、
木はごんごんと鳴りました。

紳士1 「どうも腹が空いた。さっきから横っ腹が痛くてたまらないんだ。」

紳士2 「ぼくもそうだ。もうあんまりあるきたくないな。」

紳士1 「あるきたくないよ。ああ困ったなあ、何かたべたいなあ。」

紳士2 「喰べたいもんだなあ」

二人の紳士は、ざわざわ鳴るすすきの中で、こんなことを云いました。

その時ふとうしろを見ますと、立派な一軒の西洋造りの家がありました。

そして玄関には

レストラン
RESTAURANT

西洋料理店
せいようりょうりてん

ワイルドキャットハウス
WILDCAT HOUSE

山猫軒
やまねこけん

という札がでていました。

紳士1 「君、ちようどいい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。
入ろうじゃないか」

紳士2 「おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかく何か

食事しょくじができるんだろう」

紳士1 「もちろんできるさ。看板かんばんにそう書いてあるじゃないか」

紳士2 「はいろいろじゃないか。ぼくはもう何かなに喰たべたくて倒たおれそうなんだ。」

二人ふたりは玄関げんかんに立たちました。玄関げんかんは白しろい瀬戸せとの煉瓦れんがで組くんで、
実じつに立派りっぱなもんです。

そして硝子がらすの開ひらき戸どがたって、そこに金文字きんもじでこう書いてありました。

「どなたもどうかお入はいりください。決けつしてご遠慮えんりょはありません」

二人ふたりはそこで、ひどくよろこんで言いいました。

紳士1 「こいつはどうだ、やっぱり世よの中なかはうまくできてるねえ、
きょう一日いちにちなんぎしたけれど、こんどはこんないこともある。

このうちは料理店りょうりてんだけれどもただでご馳走ちそうするんだぜ。」

紳士2 「どうもそうらしい。決けつしてご遠慮えんりょはありませんというのは
その意味いみだ。」

二人ふたりは戸とを押おして、なかへ入はいりました。そこはすぐ廊下ろうかになっていました。
その硝子戸がらすどの裏側うらがわには、金文字きんもじでこうなっていました。

「ことに肥ふとったお方かたや若いお方かたは、大歓迎だいかんげいいたします」
二人ふたりは大歓迎だいかんげいというので、もう大よろこびです。

紳士1 「君きみ、ぼくらは大歓迎だいかんげいにあたっているのだ。」

紳士2 「ぼくらは両方りょうほう兼ねてるから」

三場

◆扉の要求に答えていくふたりの紳士。

◆ナレーター・はじめの紳士・もひとりの紳士

ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろのペンキ塗りの扉がありました。

紳士1 「どうも変な家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだろう。」

紳士2 「これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなこうさ。」

そして二人はその扉をあけようとしますと、上に黄いろな字でこう書いてありました。

「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」

紳士1 「なかなかはやってるんだ。こんな山の中で。」

紳士2 「それあそうだ。見たまえ、東京の大きな料理屋だって大通りにはすくないだろう」

二人は云いながら、その扉をあけました。するとその裏側に、

「注文はずいぶん多いでしょうがどうか一々こらえて下さい。」

紳士1 「これはぜんたいどういうんだ。」

ひとりの紳士は顔をしかめました。

紳士2 「うん、これはきつと注文があまり多くて支度が手間取るけれどもごめんなさいと斯ういうことだ。」

紳士1 「そうだろう。早くどこか室の中にはいりたいもんだな。」

紳士2 「そしてテーブルに座りたいもんだな。」

ところがどうもうるさいことは、また扉が一つありました。

そしてそのわきに鏡がかかって、その下には長い柄のついたブラシが置いてあったのです。

扉には赤い字で、

「お客さまがた、ここで髪をきちんとして、それからきものの泥を落してください。」

と書いてありました。

紳士1 「これはどうも尤もだ。僕もさっき玄関で、山のなかだとおもって見くびったんだよ」

紳士2 「作法の厳しい家だ。きっとよほど偉い人たちが、たびたび来るんだ。」

そこで二人は、きれいに髪をけずって、靴の泥を落しました。

そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くや否や、そいつがぼうっとかすんで無くなって、風がどうつと室の中に入ってきました。

二人はびっくりして、互によりそって、扉をがたと開けて、次の室へ入って行きました。早く何か暖いものでもたべて、元氣をつけて置かないと、もう途方もないことになってしまうと、

二人とも思ったのでした。

扉の内側に、また変なことが書いてありました。

「鉄砲と弾丸をここへ置いてください。」

見るとすぐ横に黒い台がありました。

紳士1 「なるほど、鉄砲を持ってものを食うという法はない。」

紳士2 「いや、よほど偉いひとが始終来ているんだ。」

ふたり 二人は鉄砲をはずし、帯皮を解いて、それを台の上に置きました。
また黒い扉がありました。

「どうか帽子と外套と靴をおとり下さい。」

紳士1 「どうだ、とるか。」

紳士2 「仕方ない、とろう。たしかによっぽどえらいひとなんだ。
奥に來ているのは」

ふたり 二人は帽子とオーバーコートを釘にかけ、靴をぬいで ぺたぺたあるいて
扉の中にはいりました。

扉の裏側には、

「ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、財布、その他金物類、

ことに尖ったものは、みんなここに置いてください」

と書いてありました。扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、
ちゃんと口を開けて置いてありました。鍵まで添えてあったのです。

紳士2 「ははあ、何かの料理に電気をつかうと見えるね。
金気のものあぶない。ことに尖ったものはあぶないと斯う云うんだろう。」

紳士1 「そうだろう。して見ると勘定は歸りにここで払うのだろうか。」

紳士2 「どうもそうらしい。」

紳士1 「そうだ。きつと。」

ふたり 二人はめがねをはずしたり、カフスボタンをとったり、みんな
金庫のなかに入れて、ぱちんと錠をかけました。

四場

◆扉を進み、クリームと香水を塗る二人の紳士。
◆ナレーター・はじめの紳士・もひとりの紳士

すこし行きますとまた扉があつて、その前に硝子の壺が一つありました。
扉には斯う書いてありました。

「壺のなかのクリームを顔や手足にすっかり塗ってください。」
みるとたしかに壺のなかのものは牛乳のクリームでした。

紳士1 「クリームをぬれというのはどういうんだ。」

紳士2 「これはね、外がひじょうに寒いだろう。室のなかがあんまり暖いとひびがぎれるから、その予防なんだ。どうも奥には、よほどえらいひとがきている。こんなところで、案外ぼくらは、貴族とちかづきになるかも知れないよ。」

二人は壺のクリームを、顔に塗って手に塗って それから靴下をぬいで足に塗りました。それでもまだ残っていましたから、それは二人ともめいめいこっそり顔へ塗るふりをしながら喰べました。

それから大急ぎで扉をあけますと、その裏側には、

「クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましたか、」

と書いてあつて、ちいさなクリームの壺がここにも置いてありました。

紳士1 「そうそう、ぼくは耳には塗らなかつた。あぶなく耳にひびを切らすとこだった。ここの主人はじつに用意周到だね。」

紳士2 「ああ、細かいとこまでよく気がつくよ。ところでぼくは早く何か喰べたいんだが、どうも斯うどこまでも廊下じゃ仕方ないね。」

するとすぐその前に次の戸がありました。

「料理はもうすぐできます。」

十五分とお待たせはいたしません。

すぐたべられます。

早くあなたの頭に瓶の中の香水をよく振りかけてください。」

そして戸の前には金ピカの香水の瓶が置いてありました。

二人はその香水を、頭へぱちやぱちや振りかけました。

ところがその香水は、どうも酢のような匂がするのです。

紳士1 「この香水はへんに酢くさい。どうしたんだろう。」

紳士2 「まちがえたんだ。下女が風邪でも引いてまちがえて入れたんだ。」

五場

◆山猫軒を怪しみだす二人の紳士。

◆ナレーター・はじめの紳士・もひとりの紳士

ふたりと
二人は扉をあけて中にはいりました。

と
扉の裏側には、大きな字で斯う書いてありました。

「いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でした。

もうこれだけです。どうかからだ中に、壺の中の塩をたくさん

よくもみ込んでください。」

なるほど立派な青い瀬戸の塩壺は置いてありましたが、こんどという

こんどは二人ともぎょっとしてお互にクリームをたくさん塗った顔
を見合せました。

紳士1 「どうもおかしいぜ。」

紳士2 「ぼくもおかしいとおもう。」

紳士1 「沢山の注文というのは、向うがこっちへ注文してるんだよ。」

紳士2 「だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは、
せいのりより、来た人にたべさせるのではなくて、来た人を西洋料理にして、
食べてやる家とこういうことなんだ。これは、その、つ、つ、つ、つまり、

ぼ、ぼ、ぼくらが……。」

がたがたがた、ふるえだして もうものが言えませんでした。

紳士1 「その、ぼ、ぼくらが、……うわあ。」

がたがたがたふるえだして、もうものが言えませんでした。

紳士2 「遁げ……。」

がたがたしながら一人の紳士はうしろの戸を押そうとしましたが、どうです、戸はもう一分も動きませんでした。

奥の方にはまだ一枚扉があつて、大きなき穴が二つつき、銀いろのホークとナイフの形が切りだしてあつて、

「いや、わざわざ苦勞です。

大へん結構にできました。

さあさあおなかにおはいりください。」

と書いてありました。おまけにかぎ穴からはきよろきよろ二つの青い眼玉がこつちをのぞいています。

紳士1 「うわあ。」

がたがたがたがた。

紳士2 「うわあ。」

がたがたがたがた。

ふたりは泣き出しました。

六場

◆扉の奥で山猫が舌なめずりするが、獵犬に助けられるふたりの紳士。
◆ナレーター・はじめの紳士・もひとりの紳士・山猫1・山猫2

すると戸との中なかでは、こそそここんなことを云いっています。

山猫1 「だめだよ。もう氣きがついたよ。塩しおをもみこまないようだよ。」

山猫2 「あたりまえさ。親分おやぶんの書きかようがまずいんだ。あすこへ、いろいろ注文ちゅうもんが多くてうるさかったでしょう、お氣きの毒どくでしたなんて、間拔まぬけたことを書いたもんだ。」

山猫1 「どっちでもいいよ。どうせぼくらには、骨ほねも分わけて呉くれやしないんだ。」

山猫2 「それはそうだ。けれどももしここへあいつらがいって来こなかったら、それはぼくらの責任せきにんだぜ。」

山猫1 「呼よぼうか、呼よぼう。おい、お客きやくさん方がた、早くはやいらっしやい。いらっしやい。いらっしやい。お皿さらも洗あらってありますし、菜なっ葉はももうよく塩しおでもんで置おきました。あとはあなたがたと、菜なっ葉はをうまくとりあわせて、まっ白しろなお皿さらにのせるだけです。はやくいらっしやい。」

山猫2 「へい、いらっしやい、いらっしやい。それともサラダは嫌きらいですか。そんならこれから火ひを起おこしてフライにしてあげましょうか。とにかくはやくいらっしやい。」

二人ふたりはあんまり心こころを痛いためたために、顔かおがまるでくしゃくしゃの紙屑かみくずのようになり、お互たがいにその顔かおを見合みあわせ、ぶるぶるふるえ、声こえもなく泣なきました。

中^{なか}ではふっふっとわらってまた叫^{さけ}んでいます。

山猫¹ 「いらっしやい、いらっしやい。そんなに泣^ないては折角^{せっかく}のクリームが流^{なが}れるじゃありませんか。へい、ただいま。じきもってまいります。さあ、早く^{はや}いらっしやい。」

山猫² 「早く^{はや}いらっしやい。親方^{おやかた}がもうナフキンをかけて、ナイフをもって、舌^{した}なめずりして、お客さま方^{きやくがた}を待^{まち}っています。」

二人^{ふたり}は泣^ないて泣^ないて泣^ないて泣^なきました。

そのときうしろからいきなり、

犬^{いぬ}たち 「わん、わん、ぐわあ。」

という声^{こえ}がして、あの白熊^{しろくま}のような犬^{いぬ}が二疋^{にひき}、扉^とをつきやぶって室^{へや}の中に飛^とび込^こんできました。鍵穴^{かぎあな}の眼玉^{めだま}はたちまちなくなり、犬^{いぬ}どもはううとうなってしばらく室^{へや}の中^{なか}をくるくる廻^{まわ}っていましたが、

また一声^{ひとこえ}

犬^{いぬ}たち 「わん。」

と高く吠^ほえて、いきなり次^{つぎ}の扉^とに飛^とびつきました。戸^とはがたりとひらき、犬^{いぬ}どもは吸^すい込まれるように飛^とんで行^いきました。

その扉^との向^{むこ}うのまっくらやみのなかで、

山猫^{たち} 「にゃあお、くわあ、ごろごろ。」

という声^{こえ}がして、それからがさがさ鳴^なりました。

室^{へや}はけむりのように消^きえ、二人^{ふたり}は寒^{さむ}さにぶるぶるふるえて、草^{くさ}の中^{なか}に立^たっていました。

見^みると、上着^{うわぎ}や靴^{くつ}や財布^{さいふ}やネクタイピンは、あっちの枝^{えだ}にぶらさがったり、

こっちの根もとにちらばったりしています。風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

犬がふうとうなって戻ってきました。

そしてうしろからは、

猟師 「旦那あ、旦那あ、」

と叫ぶものがあります。

二人は俄かに元気がついて

紳士たち 「おおい、おおい、ここだぞ、早く来い。」

と叫びました。

簑帽子をかぶった専門の猟師が、草をざわざわ分けてやってきました。

そこで二人はやっと安心しました。

そして猟師のもってきた団子をたべ、途中で十円だけ山鳥を

買って東京に帰りました。

しかし、さっき一ぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、東京に帰っても、お湯にはいっても、もうもとのとおりになおりませんでした。

〈完〉



1 場

紳士：上品で礼儀正しい男性のことです。女性の場合は「淑女」と呼びます。

イギリスの兵隊のかたち：イギリス陸軍の軍服は、複数種類があります。なかでも赤色の上着に黒いズボンが有名ですが、全身カーキ色の制服もあります。種類が多いので、どの制服を指しているのかは不明ですが、外套を着ているので、冬服姿の可能性あります。賢治はイギリスに憧れをもっていました。実際にイギリスに行くことはありませんでした。ちなみに、この箇所は、第二次世界大戦の直後、アメリカ GHQ に問題視され、削除されたことがあります。

ぜんたい：一体全体、まったく、という意味です。

山鳥：山に棲む鳥全般を指します

が、特にキジ目キジ科のヤマドリや、ライチョウのことを指す場合もあります。ヤマドリは水炊きにして食べると美味なんだとか。

2 場

西洋造りの家：畳や障子が使われる日本風の家に対して、板敷きやレンガで作られた西洋的な造りをした家です。西洋造りの家は現代では珍しくありませんが、第二次世界大戦以前の日本では珍しく、「西洋館」とも呼ばれました。東京駅や神戸の異人館などが有名です。

白い瀬戸の煉瓦：「瀬戸」は陶器の名産である愛知県北部の地名ですが、転じて磁器や陶器（瀬戸物・瀬戸焼）全体も指します。国内で生産される煉瓦は赤色をしているので、ここでいう「白い瀬戸の煉瓦」は、煉瓦のように長方形をしたタイルのことかもしれません。明治時代に建てられた西洋

館、旧石川組製糸西洋館には、玄関に白いタイルが貼られています。

3 場

ロシア式：寒い地域では、寒さを少しでもさへぎるために、リビングまでに複数のドアがある場合があります。ロシアでは、玄関のドアが二重になっている場合もあるそうです。

髪をけず(る)：髪をくしなどでとかすことです。

帯皮：革製の帯のことで、これは鉄砲の弾を腰に提げるためのベルトです。

外套：西洋のオーバーコート。防寒用のアウターです。

オーバーコート：外套と同じです。

カフスボタン：洋服の袖口に、

汚れを防ぐためにつける細長い布を「カフス」といい、それを留めるためのボタンが「カフスボタン」です。様々なデザインのものがあり、おしゃれグッズとしても使われます。

金物類：金属でできたものをまとめた呼び方です。現代では数が減っていますが、「金物屋」ではクギやネジといった金具のほか、DIY

▼外套



に使うような取っ手やレールなどを売っていました。

金気のもの：金属が含まれるもののことです。

4 場

ひびがきれ(る)：寒いときに肌が

乾燥してひびができることです。現代では「あかぎれ」と言うことが多いでしょうか。ひびがきれることを避けるためにハンドクリームを塗る人もいますね。

貴族^{きそく}：家柄や身分の高い人のことです。贅沢で上品な生活をしているイメージがあります。日本では、明治時代から第二次世界大戦以前に、特に華族という身分の人を指しました。

めいめい：それぞれ、おのおの、一人ひとりが、という意味です。料理を一人ひとりに取り分けるための皿を「銘々皿」^{めいめいざら}と呼んだりします。

下女^{げじょ}：雑用をするために雇われている女性のことです。女中ともいいます。

5場

塩壺^{しおつぼ}：塩を入れておくためのつぼです。瀬戸物は湿気を吸収するため、瀬戸物の壺に入れておくと、塩がさらさらのままに保てます。

一分も^{いちぶ}：少しも、ちょっとも、という意味です。

ホーク、サラダ：明治時代、外来語の輸入や書き言葉と話し言葉の一致が盛んにおこなわれました。特に外来語の輸入では、外来語の発音をそのままカタカナで表記することが試されました。現代では「フォーク」「サラダ」と書きますが、当時はまだ表記に揺れがありました。

6場

蓑帽子^{みのぼうし}：植物を編んで作った雪よけのためのフード付きマントのようなものです。頭にかぶると、足元まですっぽり覆うことができます。

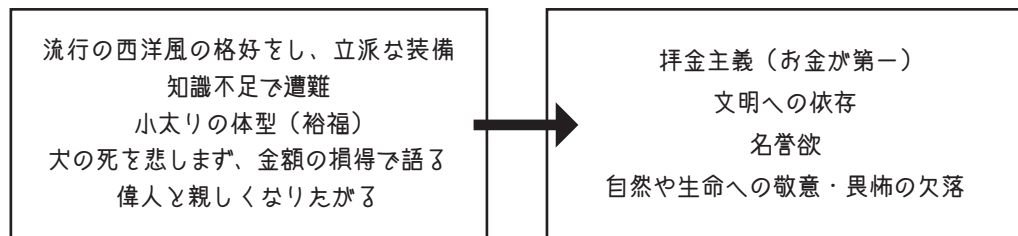
す。雪の多い地方で、雨合羽^{あまがっぱ}やコートのように使われました。



専門の猟師^{せんもん りやうし}：物語の主人公であるふたりの紳士も、狩猟をおこなうという点では猟師ですが、「専門の猟師」は、狩猟をすることで生計を立てていたり、その山に詳しくったりする猟師のことだと考えられます。山は不慣れな人だけで入ると道に迷うことも多いので、ふたりの紳士は狩猟のために専門の猟師をガイドとして雇ったのでしょう。

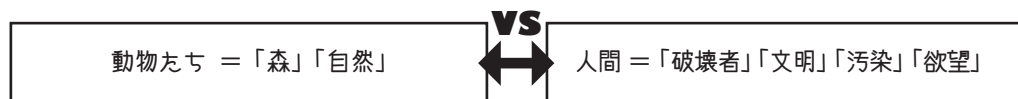
✂️ どんなテーマ？

このお話は、賢治から見た、当時の近代人に対する皮肉や批判だとされています。



✂️ ジブリ作品との共通点

擬人化された動物がしゃべり、人間と共存／対立するお話は、ジブリ作品に影響を与えていると言われています。



劇団ののが思う、ここが共通点だ！

『もののけ姫』：白い大きな山犬が戦い、最後に死んでしまいます。うなりながら果敢に挑み掛かる姿が似ています。

『平成狸合戦ぽんぽこ』：狸が、狐に招待されて接待を受けます。その宴会場は、最後、大量の紙幣を風で巻き上げながら、空中に飛び去って行きます。料理店が風と共に消えて行く様子に似ています。

『千と千尋の神隠し』：物語の冒頭、ヒロインの両親は迷い込んだ先で屋台を見付け、欲のままに料理を食べ続け、豚に変身してしまいます。食べ物と人間の欲深さの関係性が似ています。

『天空の城ラピュタ』：宝島のラピュタに到着した軍人たちは、無心に財宝を漁ります。権威の象徴である軍服を着た欲深い人間像が似ています。

✂️ いくつか残る疑問点

賢治自身、「みなさんわからないところもあるでしょうが、その点についてはわたしもわかりません」と述べているので、わからないところは読み手が自由に想像して楽しむことができます！ 皆さんも、不思議なポイントについて考えたり、話し合ったりしてみてくださいね。

Q. 犬は冒頭で1度死んだが、ラスト、なぜ生き返ったのか？ 死んだというのは早とちりだったのでしょうか？ 何か、山の神様の力などで息を吹き返したのでしょうか？

Q. 親分は誰なのか？ 親分も山猫なのかどうか、お店のオーナーなのか、などなど、定かではありません。山の主、森の神など、山猫の上に立つ、もっと大きな力が働いているということも考えられます。

✂️ オノマトペの多用

賢治は、短いお話の中で、実に多くの擬音語・擬態語を使用しています。

動作・鳴き声	感覚
●紳士たち ずんずん廊下を進んで ぺたぺたあるいて 頭へばちやばちや振りかけ がたがたがたがた、ふるえだして ぶるぶるふるえ	タンタアーンと、やって見たい ぼうっとかすんで
●犬たち くるくるまわって、それからどっと倒れる うとううなって ふうとううなって わん	モノの様子 ひかひかする鉄砲 金じかの香水の瓶 くしゃくしゃの紙屑
●山猫たち きょろきょろ二つの青い眼玉が こぞこぞこんなことを にやあお、くわあ、ごろごろ	自然の描写 山奥の、木の葉のかさかさしたところ 風がどろと吹いてきて、草はざわざわ、 木の葉はかさかさ、木はどろんどろんと 鳴りました ざわざわ鳴るすすき
●獵師 草をざわざわ分けて	

✂️ 出版と失敗

1924（大正13）年、24歳の時に、友人と自主出版した「注文の多い料理店 〜イーハトヴ童話〜」という短編童話集の、3番目の話として収録されました。

「注文の多い料理店」を本全体のタイトルに決めた際は、「飲食店の商業本だと思われるのではないか」という反対意見も出ていたそうです。今ではすっかり誰もが知るタイトルですが、なるほど、初めて見る場合は、確かに紛らわしいかもしれません！

当時、1冊1円60銭（8,000～10,000円程度）と高額すぎ、中身の評判もさざんだったんで、大量に売れ残りました。身内で買い取ったり、近所の子どもに配ったりするハメに。当初の予定では、全12巻のうち1冊目のつもりでしたが、残り11冊は出せなくなりました。

結果、賢治が生前に出した単行本は、実は2冊だけで、今のように人気が出たのは、戦後、つまり賢治が亡くなった後のことです。今、こうして色々なところでドラマ、アニメ、絵本、影絵、人形劇、朗読劇などになっていることを、賢治と出版仲間に教えてあげたい。

ところで、劇団内で時々話題になるのですが、皆さんは、生前全く注目されず不遇のまま亡くなった画家や作家が、後の世で評価され有名になった場合、芸術家として幸せだと思いますか？ 難しい問題です！ 劇団ののメンバーは「生きている間にお金をもらって、みんなから褒められたい」という人がほとんどでした（笑）

✂️ これだけある！ 日本中の山猫軒

日本全国には、「山猫軒」「山猫」などの名前が付くお店がたくさんあるようです。喫茶店、ラーメン屋さん、猫カフェなどなど。岩手県花巻市にある、賢治の記念館の近くに、『注文の多い料理店』のレストランを再現した白い壁の洋食屋さんがあるようです。



参考：Google Map

✂️ いくつか残る疑問点

今回の音源は、栗田はねくんが、ホラーのゲームを意識して編集しました。扉を開けて次のステージへ。紳士が体験した看板の指示の恐怖、今一度、じっくり体験してみましょう。皆さんなら、どこで、指示の本当の意味に気付くと思いますか？

